

近世以降の濃尾平野揖斐川右岸地域における水域の変遷

田代 喬（名古屋大学減災連携研究センター）

はじめに

濃尾平野は、傾動地塊運動に伴って生じた沈降盆地に、木曾、長良、揖斐の三川からの流出土砂が堆積することにより形成されてきた。西端には養老山地があってその東側は沈降し続けていることから、西側の標高は相対的に低い。江戸時代には、尾張藩領を守る「御囲堤」（連続堤）が築かれた一方、その対岸地域では各集落単位を堤防で囲う「輪中集落」が展開されてきた歴史を有する。近代以降に各河川に築かれた連続堤は「氾濫原」を河道から隔離し、大規模な圃場整備は湿田を乾田に変えてきた。かつての湿田は、周囲から集めて盛り土した「堀田」とそれに伴う「堀つぶれ」（田舟が行き交う水路）によって構成されたこともあり、当地の水域環境は劇的に変貌してきた経緯がある。

揖斐川右岸地域は濃尾平野西方の海岸/氾濫平野にあって、揖斐川右支川津屋川（流域面積 71.2 km²、幹線流路延長 12.6 km）の排水域に位置付けられる。津屋川の本川流路は 1656 年以降に人為的に定められ、養老山地からの複数の扇状地の末端を繋いで流れており（養老町教育委員会 1991）、平時には湧水河川の様相を呈する（岐阜県 2001）。本研究では氾濫原における水域変遷の実態を探るため、揖斐川右岸から広がる低地域を対象に、これまでに発行された地図を分析して池沼の変遷を考察する。なお、国土交通省河川砂防技術研究開発公募・地域課題分野（河川生態）「木曾三川流域における生物群集を対象とした河川生態系の管理手法に関する研究」（代表：森誠一）の一環として実施した。

材料と方法

調査地は、養老郡養老町・海津市南濃町に属し、揖斐川支川の牧田川と養老山地から連なる小規模扇状地に囲まれた低地域である。このうち、牧田川と津屋川に挟まれた海岸/氾濫平野は「多芸（たぎ）地区」と呼ばれ、小規模な集落を含む複合輪中を呈する。水域の変遷を把握するため、1891～2015 年測量の 9 年代の地形図（大日本帝国陸地測量部 1893, 1924, 1935；国土地理院 1965, 1973, 1981, 1986, 1993, 2016）から抽出して経年変化を調査した。養老郡史（岐阜県地方改良協会養老郡支会・岐阜県郷土資料刊行会 1970）、養老町史（岐阜県養老郡養老町 1978）、南濃町史（岐阜県海津郡南濃町 1982）や養老町教育委員会などによる各種文献、および、土地条件図（地理院地図 <https://maps.gsi.go.jp>）、空中写真（国土地理院撮影、地図センター販売）、水害地形分類図（建設省中部地方建設局木曾川上流工事事務所 1976）などの各種地図情報を参照することによって、近世以降に生じた土地改変から水域の変化を考察した。

結果と考察

地形図から抽出した水域数によると、1891 年（68 力所）から 1959 年（85 力所）にかけて増加した後、現在は減少している（2015 年、55 力所）。近世以降、連続堤の整備に伴って浸水リスクが低減した氾濫原の農地転用が進む中で、大湖沼の干拓が進み水域が細分化されたが、その後の伊勢湾台風襲来（1959 年）などに伴う大規模氾濫（養老町 1962）により土地改良（圃場整備）が進展する副次的影響が生じ、水域が減少してきた様子が確認された。文献調査からは、養老町と南濃町は養老山地から連なる微高地に依拠しつつ低地域の新田開発によって発展してきたこと、その過程で集落や新田を守るために整備された輪中堤は水域の形成・維持に寄与してきたことが示唆された。すなわち、小水域はそれぞれに機能を有し、(1)輪中集落の合間を縫う排水路（旧 村落江などと呼称）、(2)排水先の調節池（干拓された「下池」など）や(3)集落内で共同利用されてきた池沼（「細池」など）などに区分された。なお、現存水域は(3)が多く、地域の入会地（私有地）として共同管理されていることが存続要因として推察された。